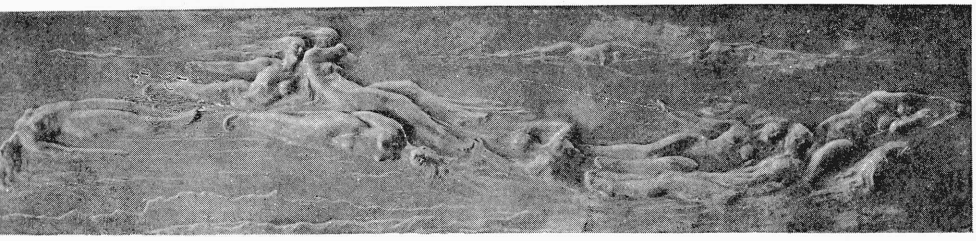
ISSN 0582－4478

京都大学附属図書館報



静脩

1984年1月

Vol. 20, No. 2

The Kyoto University Library Bulletin

読　書　法　雑　感

数理解析研究所教授　広　中　平　祐

昔から読書のタイプとして精読型と乱読型の二つのタイプがあるといわれている。精読型と呼ばれる人は，これぞという少数の書物を選択して，それらを細部にわたるまで時間をかけて徹底的に読破し，必要なら繰返し読んで自分のものとするという読書のタイプである。自分の知識の原点を確立して，そこから出発して色々の方向に知識を広げていこうという，いわば極座標方式である。これに対して乱読というのは，ちょっと言葉が悪くて自分の多読を卑下して言う場合もあるが，要するに手当り次第読む型で，はじめから特定少数の本を厳選して読書本を限定することなく，興味の向くままにあれもこれもと一応通読しておいて印象に残った部分をひろっていき，その連鎖から総合的な視野とか自分自身の視点をさぐっていくという読書のタイプである。これを極座標に対比していえば，格子座標方式ともいえる。

一般的にいって理科系の人間には極座標方式の型が多く，文化系には格子座標型が多いように思える。勿論理科系の人間といっても，その枠の中でよくよく観察比較してみれば，その人が持って生まれた性格，少年時代の読書環境から身についた習性，また直面する研究課題の性質などによって，読書の型も千差万別であるといえる。

若い数学者，大学生や大学院生などを観察してみると，一般的に極座標型は早くから実質的でオリジナルな論文を書き始め，格子座標型はオリジナル論文を書き始めるのは遅いが何年かすると驚くような好論文をものにする大器晩成型が多い。数学者の中にも精多読ともいうべき例外はまれにいる。

僕がフランスに留学していた頃の指導教官グロータンディーク（1966年フィールズ賞受賞）は精多読型の典型であった。彼はナチの収容所で親を失って単身パリにぬけ出して来たという伝説もあるユダヤ系の無国籍数学者だが，彼が代数幾何学に興味をもち始めてその分野を根底から自分流に書き直す作業にとりかかっている頃，僕は偶然の知遇を得た。パリのポアンカレ研究所の図書室で彼を見かけると，いつも日本流の鉢巻きをしめて読書に熱中していた。午後，彼の鉢巻姿をみかけて，僕は僕なりの文献調べを終り街に出てコーヒー一杯ひと休みして図書室にもどってみると，グロータンディーク先生は相変らず全く同じ姿勢で読書を続けていた。当時の彼は，その異才ぶりを誰もが認めていたとはいえ代数幾何学の分野では彼の論文は入門課題に関するものが多く，量の割りに質に乏しいという見方をする先輩数学者が少くなかった。アブストラクト・ナンセンスの洪水だとかバブロの塔を築く男といった見方をする数学者もいた。彼は先輩代数幾何学者の論文をひとつびとつ精読し，それを批判し，自分流に書き直

すという作業に邁進しているかに見えた。読んだ論文の些細ともいえる欠点をこっぴどく批判することもあって，彼の数学に対する感覚を疑う先輩もいた。

あるときパリの街の喫茶店で，グロータンディークと先輩格のセールと三人でコーヒーを飲みながら数学談義に花を咲かせていた。セールは28才の頃フィールズ賞を受賞した天才数学者で，当時代数幾何学ではリーダー格の先輩だった。数学談義のあと，ふとセールが僕の方に向って「広中，お前はグロータンディークのアブストラクト・ナンセンスをどう思う」と聞いた。あたかもグロータンディークを彼の面前でなじるような口振りに，未だ駆け出しの数学学生に過ぎぬ僕はとまどった。セールが立ち去ったあと，グロータンディークは僕に向かって「あと二年まってくれ。金の牛がやって来る」といって目を輝かせた。

後日談になるが，7年後彼がフィールズ賞を受賞したとき，その業績をたたえる講演を引き受けたのは，そのセールだった。ちなみに僕の受賞のときの講演はグロータンディークが受持った。

読書の話にもどるが，本格的に始めから終りまで読む直読に対比して，読むともなく，どこからともなくページをめくっては瞑想にふけるといった方式の眺読ともいえる読書方式もある。

戦後食糧難のとき闇市売を一切拒否して栄養失調で43才の命を絶った数学者岡村博教授は，聞くところによると典型的な眺読タイプだったという。図書室より借りた本を机の上において読むともなく眺める読書だったというが，彼が「わかった」というときには本の内容に関する深い洞察に同僚達は目をむいたという。彼の業績には，その当時の常套手法から割りだせぬオリジナリティが光っており，早世が惜まれる。

ともあれ，読書には様々な型があるもので，どの型がどの型より優れているというものではないようだ。自分の性格にマッチした読書方式が，その人にとって最良であるといえる。

―― 資料紹介 ―― ①

外国図書（大型コレクション）について

昭和57年度外国図書（大型コレクション）購入費により下記の資料を購入し，附属図書館に蔵置しておりますので御利用下さいますよう御案内いたします。

なお，この資料について文学部の梶山雄一先生に詳しい解説を執筆していただきましたので，御利用の手引きとして紹介いたします。

デルゲ版チベット大蔵経

文学部教授　梶　山　雄　一

今回（1982年度），ダルマ出版社刊行の『デルゲ版チベット大蔵経』一部（117巻120冊）が本学附属図書館に購入され，本学のみならず，西日本のチベット学関係者に歓迎されるにいたったので，この書物について簡単な解説を行うことにする。

ダルマ出版社というのは，カリフォルニア州，バークレーにあるニンマ研究所附属の出版社である。「ニンマ」というのはチベットにおいて最古の伝統をもつ仏教学派の名前「ニンマ派」からとったもので，この学派の出身である，タルタン・トゥルク・ラマが所長となって，教育・学術・文化にわたる広範な活動を続けているのがニンマ研究所である。

チベットの宗教と文化に対しては，古くから世界の言語学者や仏教学者は強い関心をもっていて，研究業績も積み重ねられてきている。しかし，とくに最近，チベット・ブームとさえいえる

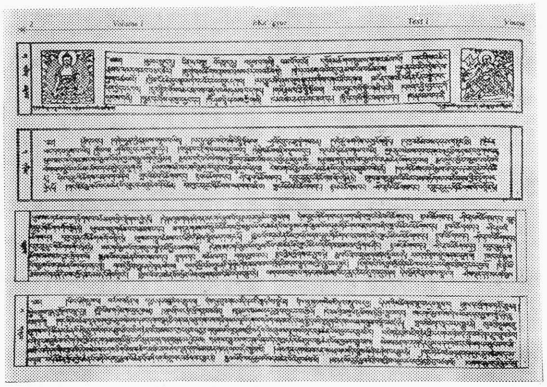
ような現象があらわれてきたのにはいろいろな理由がある。1959年から60年にかけて中国がチベットを解放したさいに，大量のチベット人，しかもラサの高官や諸方の大寺院の高僧たちの多くが，インドへ亡命し，ついで欧米各国へ移住した。これらの人々は現在，世界各地で活躍している。1973年以来，チベット文化圏に属するラダックやブータンなどの諸国が門戸を開放し，各国からの学者や調査隊を惹きつけた。さらに，いわゆるシルクロード・ブームがチベットへの関心にも拍車をかけたのである。

チベットには古くからボン教といわれる土着の宗教があった。これは現在にいたるまで仏教と並んで，あるいは混合して行われている。仏教は，7世紀前半に吐蕃王国を樹立したソンツェン・ガンポ王（581—649）のときに，中国とネパールの双方から導入された。チソンデツェン王（742—797）の時代には，インドからシャーンタラクシタとパドマサムバヴァとの2人の偉大な仏教僧が入蔵し，サムエにチベット最初の僧院を建造し，最初のチベット人出家6人（試みの6人）を得度した。

この頃のチベットには中国の禅宗とインドの中観仏教およびタントラ仏教とが並び行われていて，その間に対立と抗争もあった。シャーンタラクシタの没後，その有能な弟子カマラシーラが招かれて入蔵し，中国僧大乗和尚とサムエにおいて宗論をたたかわせた。その結果，頓悟禅を唱道していた大乗和尚が敗れ，チベット仏教はその後長く，インドの中観仏教とタントラ仏教を主流とするものとなる。

文化の伝播というものは，一般に想像されるよりも，実際は，はるかに速やかに行われるもので，サムエ寺定礎の775年から半世紀足らずの後，9世紀初頭には，現在でも用いられている標準的な仏教サンスクリット語—チベット語辞典『翻訳名義大集』(Mahāvyutpatti)が編集され，チベット人の仏教知識も急速に高まり，仏教経典や論書の翻訳も集積され，仏典目録も編まれた。

興味あることに，ビルマ・タイ・カムボジャ・ラオスなど東南アジア諸国の仏教僧は，インドから



スリランカに伝わった仏教語パーリ語をそのまま用いてきたのに，チベット人や中国人はインドのサンスクリット仏典を自国語にまず翻訳し，その後は原語をあまり顧みなくなる。もっとも日本の仏教徒はサンスクリット語は知らなかったけれども，漢訳仏典をそのまま読んでいたから，どちらの類型に属するか，判定しがたい。

チベット仏教史を述べている余裕はないけれども，チベットでは吐蕃王朝最後のダルマ王(841—43在位）によって一度廃仏が行われた。しかし王は843年に殺され，王朝は分裂，そのまま滅亡する。吐蕃王朝滅亡後，中央チベットは混乱が続いたが，西部および東北チベットの諸侯は仏教復興に努め，リンチェンサンポを初めとする21人の僧がインドに派遣され，1042年にはインドのヴィクラマシーラ寺の座主であったアティーシャ（980—1052）のチベット招請に成功した。アティーシャの指導のもとにチベット仏教は本格的に復興し，隆盛に向かった。吐蕃王朝の仏教を「前伝」というのに対し，復興以後の仏教を「後伝」という。前伝仏教がいわば王朝の仏教であったのに対し，後伝はいわば民衆の仏教であり，多くの宗派が成立してきた。この辺の事情は，日本における奈良・平安の仏教と鎌倉仏教との相違に似ているし，年代的にもほぼ並行している。

12世紀末から13世紀初頭にはイスラム教徒がベンガル湾に至るまでの北インドを席捲し，ビハール州からベンガル州にわたって集中していた仏教の大僧院はことごとく破壊され，インド仏教は事実上滅亡する。大勢のインド僧が亡命してチベッ

トに流入したが，それはチベット仏教にとってはかえって幸いなことであったろう。チベット仏教を大成した大学僧ツォンカパ（1357—1419）は14世紀にあらわれて，ゲルク派とよばれる、その後のチベット仏教の主流となった学派を創立した。

この頃にはほとんどすべてのインド仏典はチベット語に翻訳されていたうえに，チベット人自身の著した仏教書も数多くなっていて，それぞれ集成の努力も始められた。「チベット大蔵経」というのはインドで成立した仏典のチベット訳を集めたものであり，チベット人自身の著作は「蔵外文献」と呼んでいる。「大蔵経」は経典（密教タントラを含む）の集成である「カンギュル」と，論書の集成である「テンギュル」との二大部より成る。

最初の大蔵経は14世紀初めに，ナルタン寺の蔵書に，諸地方から蒐集したものを加えて編集された。ただしこれは墨と筆によって書かれた写本であった。これを基礎にして重複したものを削り，足りないものを付加して，各寺院でカンギュル・テンギュルがそれぞれ確定されてゆく。

木版による最初の大蔵経は中国の明の永楽帝によって1410年に開版され，少し遅れてジャン版（のち，リタン版と呼ばれる）がチベット人によって開版された。しかしいずれもカンギュルだけであった。17世紀から18世紀にかけて，カンギュル・テンギュル両方を含む，いわゆる四大チベット大蔵経が開版された。

1)北京版　康熙帝開版　カンギュル　1684—92
　　雍正帝〃〃　テンギュル　1724
2)デルゲ版　テンパツェリン王
　　カンギュル　1729—33
　　テンギュル　1737—44
3)新ナルタン版　第7世ダライラマ
　　カンギュル　1730—32
　　テンギュル　1741—42
4)チョネ版　カンギュル　1733—43
　　テンギュル　1753—73

この他に第13世ダライラマの命によって1923年にラサ版が開版されたが，これはカンギュルだけである。

版木はかなり大型の，横長の長方形で，横書きで7行あるいは8行に文字を彫っている。四大版のうち最も正確で校正のゆきとどいたものがデルゲ版で，北京版がこれに次ぐ。ナルタン版はしばしばテキストの古形を残す点で貴重であるが，誤刻もかなり多い。チョネ版はデルゲ版をそのまま覆刻したようで，異同が少ない。学者は一つのテキストを読むとき，これらの4版を対照して異同を比較し，テキストを校訂するわけである。

四大版のうち北京版は，1954—59年に西蔵大蔵経研究会によって，大谷大学所蔵版をもとにして，『影印北京版西蔵大蔵経』151巻が洋書風で出版された（本学はこれを2セット所蔵）。デルゲ版版本は日本では東北大学と高野山大学に所蔵されるが，破損摩滅を防ぐため，いずれも公開されていない。高野山版のマイクロフィッシュは出版されたが，必ずしも鮮明でなく，本学は所蔵していない。したがって今回，きわめて鮮明で扱いやすい洋書風デルゲ版影印本が本学附属図書館に備えられたことは，関係者にとって，この上ない喜びである。本学附属図書館にはもともと『ナルタン版大蔵経』の版本が未整理のまま所蔵されていたが，先年，御牧克己助教授によって整理された（ただし3帙欠）。ニューヨークで出版されたチョネ版テンギュルのマイクロフィッシュは文学部図書室に備えられている。したがって本学は，完全とはいえないにしても，今回，四大チベット大蔵経を備えるにいたったのである。

インドで製作されたサンスクリット仏典は，大部分が散佚し，現存するものは一部分にすぎないので，学者はチベット訳と漢訳に頼ることが多い。『チベット大蔵経』は漢訳以上の分量をもち，しかもその翻訳は原サンスクリット語の直訳体で，漢訳よりも正確である。「チベット大蔵経」が尊重される所以である。

本学附属図書館はチベット蔵外文献をも逐次購入しつつあるから，有数のチベット文献センターとなる日も遠くないであろう。終りにお願いしておきたいことは，本学所蔵のチベット文献はいずれも貴重・高額なものであるから，使用者はとくに取り扱いに注意を払われたい。また一人で多くのテキストを独占使用することのないようにしていただきたい。

附属図書館蔵　清家文庫について

1：清家について

天武天皇の皇子舎人親王には貞代王と御原王の2王子があり，貞代王の孫通雄，御原王の孫夏野のいずれを清家（清原家）の祖とするか，をめぐって二つの説がある。いずれの説も，王子の臣籍降下に際して時の天皇から清原の姓を賜わったことになっているが，後者の夏野は，『日本後紀』，『令義解』の撰述にたずさわり，左近衛大将，大納言を経て右大臣に進み，世に双岡大臣と呼ばれた人である。一方，『読史備要』所収の清原氏系図は，前者貞代王の孫通雄を祖とする説をとり，通雄の孫房則からあとは両説とも全く同じ人名配列になっている。この房則に2人の男の子があって，第1子を業恒，次子を深養父といったが，この深養父の孫は歌集『元輔集』をのこした有名な宮廷歌人清原元輔であり，その子が『枕草子』の作者清少納言である。本稿で紹介する清家は，この深養父の兄業恒の系統で，こちらは宮廷の儒学者として名を残すことになる。この業恒から6代後の頼業は，官位こそ大外記，明経博士どまりであったが，政治的識見にすぐれ，九条兼実，源頼朝に重用されて，当時の政策決定の殆んどすべてに彼の政見が用いられたといわれている。文治5年（1189）に没したあと，車折明神として神に祭られ，後世儒学の祖師と尊崇されたが，儒学者でありながら神に祭られたのは，頼業と菅原道真だけであり，清原家の中興者といわれる所以である。

頼業から11代目，清家21代の業忠は，後小松天皇に儒学を以て仕えて侍読となり，明経博士，正三位大蔵卿に進んだが，当時すでに清原，菅原の両家が学者公家として公認されていたようである。そして業忠の孫宣賢に到って一世の傑儒と呼ばれ，世に清原家学と称されるものは，この宣賢の著録するところが中心となっているのである。宣賢は清原の生れではなく，唯一神道で有名な従二位神祇大副吉田兼倶の第3子に生れて清原家を嗣いだ人であったが，若年より儒学をよくし，当時第一流の文化人公卿といわれた山科言継の師ともなり，官位は大炊頭から侍従に進んで正三位となった。天文19年（1530），越前の守護朝倉氏の許で甍じたのであるが，儒学，国学の学究として清原の名を一層高からしめたのであった。環翠軒と号し，子弟に教授するに際して，五経，論語には専ら古註（漢・唐時代の注釈）を用い，また『日本書紀』や『職原抄』などの国語関係も講義した。この宣賢の作り用いた進講用のテキストや注釈書は，本館所蔵の清家文庫中，最古の集書となっており，またこの文庫に最も大きな価値をもたらしている。

宣賢から4代あとの秀賢の時，船橋姓を用い始めたので，以後は先の宣賢をも船橋宣賢と呼ぶようになった。秀賢も漢籍に精通し，学才のほまれが高かったが，慶長19年（1614）40才で没したので，官位は従四位上，式部少輔，明経博士で終った。その日記『慶長日件録』は有名である。

秀賢の次男賢忠は船橋から別れて，はじめ東高倉を称し，のちに伏原の姓をたてたが，この家も，以来儒学をもって宮中に仕え，賢忠とその子宣幸は，天皇や東宮に進講して恩賞を受けている。

宣幸の孫，宣條は古注学の祖といわれ，多くの門人を輩出したが，自分は後年竹内式部の門に入って垂加神道を学んだ。官位は正二位に昇り，明経博士であった。

以上述べた如く，清原家（船橋，伏原も含めて）は歴代明経博士に任じ，大学寮で経書を講究して天皇，親王以下宮廷の人々に講義することをもって仕えた学問の家柄であり，俗に「明経の家」と呼ばれていたが，これに対して，詩賦と歴史の講究をもって文章博士を独占したのが，菅原，大江の両家であった。

2：本館所蔵の清家文庫について

わが国で清家本と呼ばれるコレクションは，本館以外に，国立国会図書館，東洋文庫，大東急記念文庫，宮内庁書陵部，天理図書館などに所蔵されているが，本館のそれは，今次大戦後の昭和26年から同28年にかけての3年間にわたって，船橋家の第39代当主で，元子爵の清賢氏から直接寄贈を受けた2,365冊と，そののち同家から購入した『清家家学書34種』（すべて重要文化財に指定されており，中には旧国宝も含まれる）を中心とした289冊を加えたものであるから，これこそ質量ともに日本一の清家本のコレクションであると誇るに足るものであり，このことは学界においてもつとに喧伝されているところである。

上述した重要文化財指定書のうち，『紙本墨書孝経述義』は，巻1，2の見返しに「明応6年(1497)」という記入があり，第24代良雄（業賢）の筆になる。同じく『紙本墨書中庸朱熹章句』は「弘和2年（1382）栄山寺行宮に於て隠士禅恵書写」の奥書きがあり，これと『周礼疏』第1～4，7，8，12～14，18～40巻単疏本（単疏本とはこの『周礼疏』の場合，『周礼』の本文や，基本的な注釈を省いて，書物全体がよりくわしい注釈のみからなっているものをいう）を合せた以上3点が旧国宝に指定されていた稀覯本である。

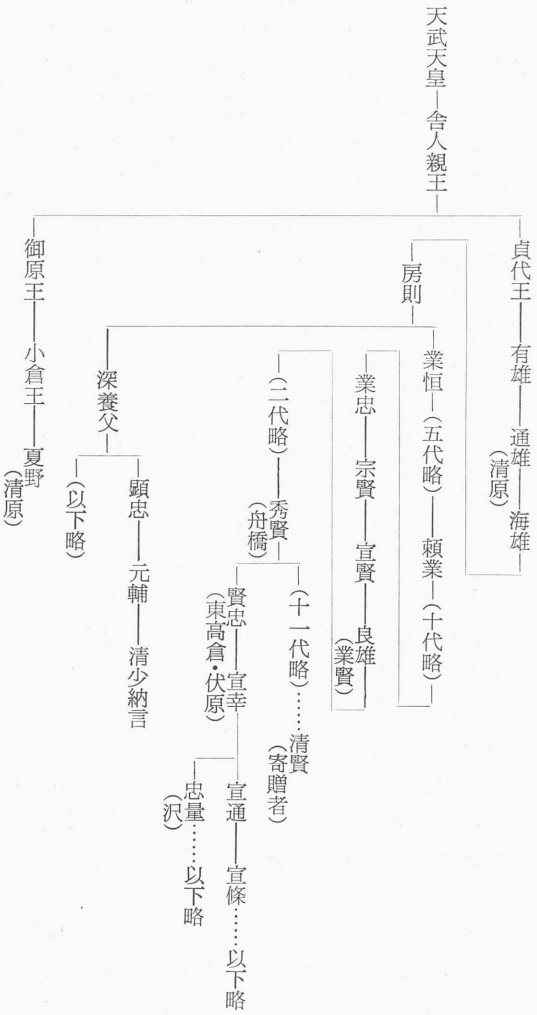
この他，宣賢自筆の『尚書聴塵』，『大学』，或いは清家累代の家訓として伝えられた延文元年（1356）10月の奥書のある『古文孝経』など，宣賢の進講本をはじめとして，一門の講説，書入れ本など，南北朝より室町中後期にいたる時代の貴重な原本が集大成されている。

上に紹介した一門の自筆書写本のみならず，刊本にも見落せないものが多く，例えば，慶長，元和年間に出版されて，世に「本能寺前町版」と名付けられた片仮名まじりの木活字版『孟子抄』，『毛子抄』など，愛書家が垂涎を禁じ得ない珍籍も含まれている。

限られた紙数から，ほんの一部を紹介したにすぎないが，本館の清家文庫が，わが国の近代化以前の思想上にあまりにも大きな位置を占め続けた儒学の研究に際して，欠くべからざるものであることを感じられるであろう。当時の天皇を頂点とする宮廷公卿たちの学んだ教養の質と方向を如実に物語る生の資料として，或は，当時の経書の韻学訓詁の重要な資料として，今後とも学界に貢献するところは大であると考えられている。

（附属図書館　廣庭基介）

清原氏系図（『読史備要』より）



外国からの文献の入手について

国際化時代に対応するため，一昨年10月本館にテレックスが設置され，研究者の要請に応じ海外との学術情報交流に使用している。

一方，国内の大学，研究機関に所蔵されていない学術文献を海外から取寄せる業務は，既に1960年代から国際交換業務の一環として，閲覧課参考掛が担当してきており，教官，大学院生に広く利用されている。しかし，このサービスについてあまり知られていない面もあるので，あらためて紹介することにする。

現在，主な依頼先としては次のような機関がある：

米国：U.S. Library of Congress (Washington). Princeton University. Yale University. Harvard University 他.

英国：British Library (本館ではクーポン券による BLLD への依頼は行っていない) Oxford University 他.

ドイツ：Universität Tübingen. Universität Köln. Universität Göttingen. Universität München. Staatsbibliothek Preussischer Kulturbesitz (Berlin) 他.

フランス：Bibliothéque Nationale (Paris)他.

オーストリア：Universität Wien 他.

スウェーデン：Uppsala Universitet 他.

申込方法

所定の用紙に必要事項（依頼機関，書名又は雑誌名，著者名，論題，範囲，出版地，出版者，出版年など）を記入し参考掛に申込む。

注意事項

a. 雑誌掲載論文の一部分を申込む場合　フランスの場合は著作権保持者への written permission が必要である。

b. 一次資料の全冊コピーの場合　著作権保護外の刊年の古いものも含めて，一応全部理由書を添付する必要がある。

c. 学位論文　アメリカの大学に提出される学位論文は，「静脩」に既報の世界学位論文抄録 (DAI : Dissertation Abstract International, A. B. 1968- C: ヨーロッパ篇1976-)に収録されているもののうち order number のあるものについては，国内の取扱い業者から入手することができ，自然科学系については，国会図書館にも保管されているので，科学技術調査室一覧で所蔵を確認の上利用することが出来る。総合学位論文索引 (CDI : Comprehensive Dissertation Index) も1861～1972, 1973-1977, 1978 supplement の累積索引が出ているので遡及的に検索できる。学位論文の依頼は，アメリカに限らず他の国への要求も多いが，殆んど論文が提出された大学への依頼が大部分を占める。イギリスの場合は著者の許可が必要である。

経費負担

原則的に私費に限っている。

費用

ゼロックスコピーの場合，本のサイズにより料金が計算される。（たとえば大学によって，1枚A4：20ペーニッヒ，A3：40ペーニッヒなど）。枚数にかかわりなく minimum charge を請求される。調査料として1件ごとに search fee が加算される機関もある。

所要日数

ドイツは大体1か月～1か月半位で入手出来，比較的早い。最近，Washington D.C.の The American University にはじめて依頼したが，8月4日付で依頼し8月29日に入手した。これは例外でアメリカの場合，私学の方が早い。テレックス通信を利用すれば，入手までの時間は相当に短縮されるはずである。

外国への文献依頼は，国内に該当する文献がないことが前提となるので，事前に国内での所在調査を十分行なわなければならない。このため，書誌情報の把握，全国書誌，所蔵目録など二次資料による確認は重要な業務である。また依頼先選定についても同様である。今年四月にオープンする

新館には，コンピューターによる情報流通のネットワークを形成することが期待されている。幅広いデータベースシステムの具備による迅速，適確な書誌情報の探索が可能になれば，外国からの文献の入手にも影響をおよぼすのではないだろうか。

（参考掛・尾崎富美枝）

古文書の取扱いに関する講習会ひらく

附属図書館では，本学の図書系職員を対象に，古文書の取り扱いに関する知識の修得ならびに資料の取り扱い技術の向上をはかるため，下記により『古文書の取扱いに関する講習会』を開催した。

記

日時　昭和58年8月8日（金）
　午後1時30分～4時30分
会場　理学部1号館共同小講義室
内容　講演ならびに和装本，巻子本，一枚物等の取扱い等についての実習
　講師　神戸大学　熱田　公教授

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 20. No. 2（通巻76号）1984年1月10日発行・編集：静脩編集委員会（責任者附属図書館事務部長）発行：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電 大代751—2111(内線)2611～2643